



## アーティストプロフィール

### 木下雄二/Yuji Kinoshita アーティスト

1994年奈良県生まれ、愛知県在住。  
 主な個展に「変身」(Art Space & Cafe Barrack、愛知、2019年)、主なグループ展に、あいちトリエンナーレ芸術大学連携プロジェクト『U27プロフェッショナル育成プログラム夏のアカデミー2019「2052年宇宙の旅」』(アートラボ・あいち、2019年)、「Lagrangian Point - Telepathy-」(Gallery PARC、京都、2019年)、「拡張する知覚-人間表現とメディアアート展」(愛知県立芸術大学 芸術資料館、愛知、2018年)など。

### D.D.(今村 哲+染谷亜里可)/Arika Someya + Tetsu Imamura アーティストユニット

2011年よりアーティストユニットD.D.として今村哲+染谷亜里可を中心に、「内が外より大きい」などの特殊な構造、あるいはナラティブなフィクションが既に孕んでいるものを引き出す試みとして、彷徨う体験型構造体を制作。主な活動に、L・アイズリーから触発された、人と夜行性動物の感覚の違いを体感する、入口から出口が見えていても出ることができない直線的迷路《昼の目 夜の目》(「遠まわりの旅」名古屋美術館、2014年)や、自在に動く蛇腹の壁によってパブリックとプライベートが入れ替わる居住スペース《2つで三人》の空間で8名で暮らす《48時間滞在プロジェクト》(「ユーモアと飛躍」岡崎市美術館、愛知、2013年)など。

### 宮田明日鹿/Asuka Miyata アーティスト

1985年愛知県生まれ、三重県在住。  
 「家庭用編み機でほぼなんでもつくる」をコンセプトに活動し、記憶の曖昧さや偶然性を取り入れた作品を制作。手芸文化を通してコミュニティを形成する「港まち手芸部」を2017年から名古屋港エリアで企画運営している。近年の主な個展に「おしらあそびせ」(awai art center、長野、2018年)、主なグループ展に、「Contextile2018」(Palácio Vila Flor - CCVF、ポルトガル・ギマランイス、2018年)「織り目の在りか 現代美術 in 一宮」(旧林家住宅、愛知、2018年)、「クリエイティブリユースでアート」(調布市文化会館たづくり、東京、2017年)など。 [asuka.miyataamiki.com](http://asuka.miyataamiki.com)

### 山下拓也/Takuya Yamashita アーティスト

1985年三重県生まれ、愛知県名古屋市在住。  
 近年の主な個展に「熊と多分インディアンと市長が警察官と背中、他」(VOU GALLERY 京都、2020年)、「Manta Ray」(Art Center Ongoing、東京、2020年)、主なグループ展に「2020年度第3期コレクション展」(愛知県美術館、2020年)、「一番良い考えが浮かぶとき」(Talion Gallery、東京、2020年、温田山での参加)、「When It Waxes and Wanes」(vbkö、オーストリア・ウィーン、2020年、温田山での参加)。  
[takuya-yamashita.com](http://takuya-yamashita.com)

### テトリアーナ・アフメッド・ファウジ/Tetriaana Ahmed Fauzi アーティスト

1979年マレーシア・クアラルンプール生まれ、ペナン州ジョージタウン在住。インスタレーションやデジタルプリント、絵画、ドローイングなど、複数のメディアを用いて制作を行う。巧みな技量と装飾を備えた女性的な美学に関心を持ち、近年はアクリル媒体の物質性と花の形について追求したり、キャンバス上の流動性のあるアクリル顔料の特徴と動植物の形の融合とを結びつけている。  
 近年の主なグループ展に、「The Far, The Near」(オンライン展覧会、Aria Gallery、イラン・テヘラン、2020年)、「Common Thread」(The BackRoom、マレーシア・クアラルンプール、2020年)、「ArtAid 19」(Whitebox Publika、マレーシア・クアラルンプール、2019年)「Climate Art Exhibition」(ダルリリアン博物館、マレーシア・イポー、2019年)、「KL Biennale Gema Belas」(マレーシア国立美術館、クアラルンプール、2018年)など。

### フォレスト・ウォン/Forrest Wong アーティスト

1990年マレーシア・ヌグリ・スンピラン州生まれ、ペナン州ジョージタウン在住。  
 特定のオブジェクトや状況に関連する身体に焦点を当て、さまざまな儀式的およびユーモラスな表現を行う。作品では自身のアイデンティティと状態を振り返りながら、現実を理解するための手段として、不条理で、不合理で、無意味なものを取り入れている。  
 主な個展に「Pass By」(マレーシア、2018年)、グループ展「Collecting Storytelling, Contemporary art from Indonesia」(シナスタジア・アートギャラリー、ニューヨーク、2019年)など。また2016年に共同アートプロジェクト「art hub-P(art)Y LAB」を共同設立。2019年には、マレーシア国立美術館が主催する若手芸術家の登竜門とされる「Bakat Muda Sezaman」の最終選考に残り、瀬戸内国際芸術祭のプロジェクト「THANK UFO」にも参加。 [forrestwong.me](http://forrestwong.me)

### フー・ファンチョン/Hoo Fan Chon アーティスト

1982年マレーシア・セランゴール州生まれ、ペナン州ジョージタウン在住。文化的および社会的構成要素としての経験と、ある文化から別の文化に移行するときに、社会の価値観がどのように変動するかを探求している。アートコレクティブ「Run Amok Gallery」(2012-17)の共同創設者でありメンバー。国際交流基金アジアセンターのキュレーターワークショップ(2015-17)の参加者の1人に選ばれたほか、台湾のNo Man's Land Residency Project - Nusantara Archive(2017-18)に参加。近年の主な個展に「BiroKaji Visual George Town」(Narrow Marrow、マレーシア・ペナン、2019年)、グループ展に第3回マカッサルビエンナーレ(Gedung Kesenian、インドネシア・マカッサル、2019年)、共同キュレーションに、「Bayangnyaitu Timbul Tenggelam-マレーシアの写真文化」展(イルハム・ギャラリー、マレーシア・クアラルンプール、2019年)など。



MAT Exhibition vol.9

# Nagoya Culture Promotion Unit Bilateral Visual Art Exhibition: Nagoya x Penang (Nagoya Head Office)

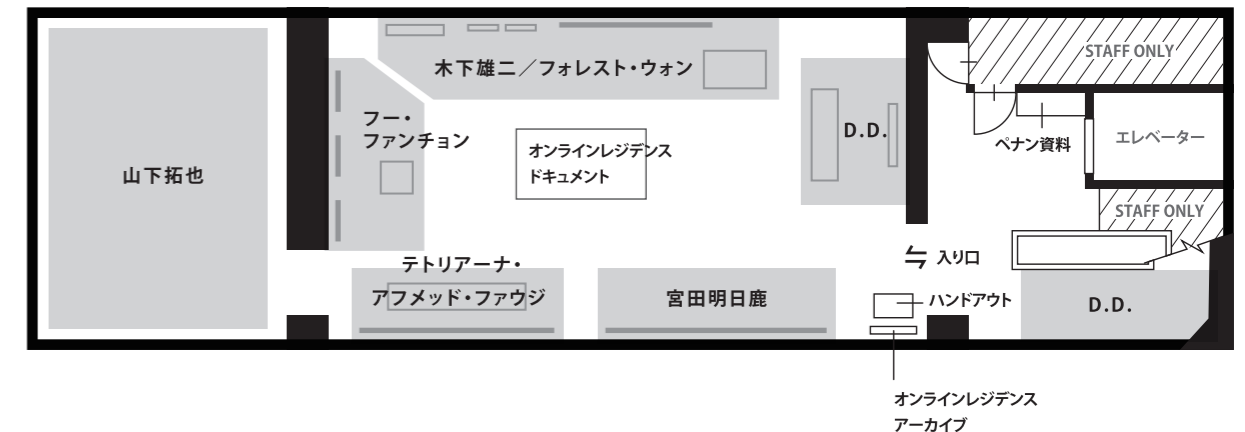
## 名古屋×ペナン同時開催展： 名古屋文化発信局 [名古屋本部]

### 2021. 2.16 (Tue) — 3.13 (Sat) Minatomachi POTLUCK BUILDING 3F: Exhibition Space

企画 | フー・ファンチョン、Minatomachi Art Table, Nagoya [MAT, Nagoya]  
 共催 | SEASUN、港まちづくり協議会  
 助成 | 令和2年度名古屋市文化芸術活動連携支援事業助成金  
 協力 | アッセンブリッジ・ナゴヤ実行委員会、国際交流基金クアラルンプール日本文化センター

港まちではこれまで数多くのアーティストが滞在制作を行ってきました。新型コロナウイルス感染症により移動が困難になったいま、オンラインでアーティストとまちが交流する共同制作を行い、その成果として展覧会を開催します。かつての東西貿易の拠点・自由貿易都市として発展してきた歴史を持つマレーシアのペナン島と、現在も活発な貿易を行う名古屋港をつなぎ、2つの地域から7組のアーティストが参加。2都市に「名古屋文化発信局」を立ち上げ、「名古屋」をテーマに、アーティストがともにリサーチ・制作した作品を発表します。

\*会場内の作品にはお手を触れないでください。  
 オンラインレジデンスドキュメントやペナンの資料は手に取ってご覧いただけます。ご覧になる際は、手指消毒にご協力ください。



[www.mat-nagoya.jp](http://www.mat-nagoya.jp)

協力 | 愛知学院大学 井上 瞳、名古屋城総合事務所  
 施工 | ミラクルファクトリー(青木一将)  
 デザイン | タン・ルイ(Tan & Kimura Press)  
 MAT, Nagoya | 青田真也、吉田有里  
 MAT, Nagoyaアシスタント | 山口麻加  
 SEASUN | 鈴木一絵  
 国際交流基金クアラルンプール日本文化センター | 友川鼎大、久貝京子、ムハマド・ナズリン・ナナ・クリザン



## ディレクションノート

コロナ禍によりあらゆる文化活動が従来のやり方からの変更を迫られる中、展覧会やトークイベントは早々にオンライン実施などに順応する試みが見られたが、大きな試練を課された活動の一つとして、近年日本でも市民権を得てきたアーティストインレジデンスというスキームが挙げられるのではないだろうか。アーティストが物理的に移動し、一つの場所に一定期間滞在する、街を探索し土地の人々と交流したり、作品制作やリサーチを行ったりする。それを海外のアーティストを招いてやりたい、でもコロナ禍の終息も見通しが立たない、という状況の中、枠組みをそのままに全てオンラインでやってみる「オンラインアーティストインレジデンス」の可能性を追求してみよう、と考えるところから今回のプロジェクトは始まった。

レジデンスであれば土地や街との関わりは避けられない。街とアーティストというキーワードが自ずと浮かび、港まちで長年まちづくりとの親和性を探りながらアートプログラムを運営しているMAT, Nagoyaのアーティスト・青田さんと一緒にやりたいと最初に決めた。海外のカウンターパートも、同じように街(可能なら港町)をベースに活動しているアーティストを迎えたいと、共催機関のJFKLにも相談し、マレーシア・ペナンを拠点とするファンクションに共同ディレクションをお願いすることにした。

こうして双方にプロジェクトの方向性を考えるディレクターを立てて議論することから始め、今回の「名古屋文化発信局」というテーマが決まった。実質的には1ヶ月半ほどの短期間で、会話を密に重ね展覧会としてまとめ上げてくれた関係各位の瞬発力・機動性に心からの感謝を捧げるとともに、本展を通して、アーティストたちの創造性によってコロナ禍という制限のある中だからこそ生まれた表現や、名古屋という街でこれまで見落とされてきた潜在的資源に目が向けられることを願いたい。

鈴木一絵 (SEASUN)

このプロジェクトは当初、都市間の文化交流レジデンシープログラムとして計画されていたが、パンデミックによってもたらされた移動制限とソーシャル・ディスタンスを伴う新しい規範への応答として、名古屋とペナンのジョージタウンの間の同時開催美術展へと形を変えた。

歴史的に、名古屋とジョージタウンはどちらも文化的多様性を備えた港湾都市である。港は、商品取引を促進するだけでなく、外国人、移民、新しい移住者、そして地元の人々との間でのつねに発生する折衝を吸収していく文化的空間でもある。それらの相互作用により、言語、料理、ファッション、風習などに変化がもたらされ、港町に特有の新しいハイブリッド文化が形成されることになった。それ以来、両都市は、グローバル市場で競争力を維持するために、自らを再考案・再ブランディングする方法を模索してきた。

名古屋文化発信局(NCPU)は、名古屋を本部、ペナンを支部とする二国間での美術展だ。都市の独自性を促進しながらアイデンティティ形成を目指す国のブランディング活動からインスピレーションを得て今回のキュレーションの枠組みとし、ペナンと名古屋から7組のアーティストがそれぞれ名古屋との関係性を再考することとなった。それは文化の中心地、住むための場所、アートのエコシステム、もしくは構築された商業ブランドとしての名古屋であり、一般的なステレオタイプのイメージを覆すためであり、または街との個人的なつながりを作るためであった。

このプロジェクトは、アーティストの視点を通して、文化を発信する行為自体について熟考し観察するために政府機関を模する形をとった。それは全体として、地元のアーティストによる自己批判的で内省的な視点で見た名古屋と外国人アーティストによるさらに美化されたイメージの名古屋を提供するものとなった。

フー・ファンクション

ファンクションからペナン側は「名古屋」をテーマにリサーチし制作を行うと聞き、では名古屋側はどのような展開ができるだろうかと考えた。順当に考えれば、こちらも「ペナン」についてリサーチを行うことで「エクステンジ」ということはできるだろう。ただそうではなく、名古屋側がペナンのアーティストをオンラインレジデンスというかたちで受け入れつつ、一緒にリサーチをしながら名古屋について考えることができないかと考えた。そこからこの「名古屋文化発信局」がスタートした。

そもそもレジデンスや旅のようにどこか別の場所に身を移したとき、普段いる場所のことについても自ずと振り返ることになる。また今回のプロジェクトのように、名古屋をテーマにしても、必ずペナンというものも対象となる。まれびとと迎える側が同じテーマを共有することで、別の広がり発展することを期待した。

またこのプロジェクトで重要なのは、それぞれのアーティストが両会場で成果を発表するという点にある。コロナ禍で移動できないこの状況で、輸送という手段も用いず、各アーティストの作品がお互いの場所や環境にあわせそれぞれのかたちでアウトプットされる。ペナンのアーティストと何かしら重なる関心や興味、技術をもった名古屋のアーティストとが時間をともにすることで、この状況が必ずしも困難でなく好機として、お互いの距離を協働へと転換させた。この新しい距離感が拓く表現にこそ、これからの「エクステンジ」のおもしろさがあると思う。

青田真也 (Minatomachi Art Table, Nagoya [MAT, Nagoya])

## 共催／企画／協力

### 港まちづくり協議会

広く内外の方々に誇れる「なごやのみ(ん)なとまち」を目指し、2006年より名古屋の港まちのエリアで、住民と行政との協働によるまちづくりの活動を行っている団体です。「暮らす、集う、創る」をテーマに、防災、子育て、各種のコミュニティ活動、魅力・賑わいづくり、アートプログラムなど、クリエイティブな視点を通じた、さまざまな事業を展開しています。

[minnatomachi.jp](http://minnatomachi.jp)

### Minatomachi Art Table, Nagoya [MAT, Nagoya]

MAT, Nagoyaは、名古屋港エリアで住民と行政との協働でまちづくりを推進する「港まちづくり協議会」が委託事業として実施するアートプログラムです。名古屋港周辺では、1980年代以降さまざまな国際的な現代アートの活動が行われてきた歴史があります。その素地を受け継ぎ、創造性をもって活動する人びとを歓迎し、制作・実践の場を創出することによって創造的なアイデアをまちに還元していくことを目指します。

[mat-nagoya.jp](http://mat-nagoya.jp)

### SEASUN

SEASUN(シーサン)は、鈴木一絵が主宰する、愛知県をベースとして東南アジアと日本を同時代のアート／カルチャーを通してつなぐプロジェクトです。シーサンはタイ語で「色、カラフル」という意味を持ち、アルファベットのSEAは東南アジア(Southeast Asia)という意味も含んでいます。東南アジアと日本の、アート／カルチャーを通じた交流にフォーカスし、人と人を繋いだり交流を生む活動を行なっています。

[season-art.com](http://season-art.com)

### 国際交流基金クアラルンプール日本文化センター

独立行政法人国際交流基金(The Japan Foundation)は、総合的に国際文化交流を実施する日本で唯一の専門機関として1972年に設立、クアラルンプール日本文化センターはマレーシアの拠点として1989年に開設され、日本とマレーシア二国間、日本と東南アジアとの域内文化交流事業におけるマレーシアの拠点としての役割を担っています。従来、人の往来をベースに企画していた私共の事業は、今年度大きく見直しを迫られると共に、試行錯誤を重ねる事となりました。本事業を開催するにあたり、来場者の皆様には、名古屋とペナンのキュレーター／アーティストの真剣勝負の試行錯誤をご覧ください。近い将来コロナ禍が収束し、この事業を通じた両国関係者のネットワークが継続・発展する事を願ってやみません。

[jfkf.org.my](http://jfkf.org.my)

## 作品について

### 木下雄二

《4out-C0rrec4》

2021

ドローイング、プリント、印刷物、ビデオ



海の向こうの友人と、名古屋についてリサーチをすることになった。弱ったことに、僕は英語が苦手で、意思疎通をするのもやっとのことで。何度か試みるうちに、なんとなく単語の意味がわかってきて、見当がつくようになってきたが、それでもやはり間違ふことが多い。

僕は、以前からコミュニケーションとjungleは似たような構造を持つと考えていた。jungleは、ヒンドゥー語を語源とする言葉で、居住地の周辺にあって踏み込むことのできないような森林や低木林を指す。居住地同士の間にある壁のようなものに、人々の間にある関係性と似たようなものを僕は感じている。

そして、奇妙なことにその友人の名前はフォレストという。なんとも変わった偶然もあるものだ、と思った。

木下雄二



木下雄二とフォレスト・ウォンは今回、コラボレーションするかたちでリサーチと制作を行った。2020年1月に港まちポットラックビルで一度出会っている2人だが、共通する言語を持たず、今回主にスマートフォンの絵文字機能を使ってコミュニケーションをはかった。また2人の外見が似ているということから、ウォンが木下の体を使って名古屋港エリアを散策したり、ウォンがペナンの骨董屋で見つけた瀬戸物の器の話や2020年に来日し名古屋に滞在した経験などが絵文字の会話に盛り込まれていたり、プロジェクトを通じて2人のキャラクターが交錯していく。

名古屋港エリアのマップを2人がトレースし、名古屋会場とペナン会場の各会場でそれぞれのマップが混ざりあうように展示される。また来場者が持ち帰ることのできるガイドマップが会場で配布され、来場者がマップを持ち帰り実際に街を歩くことで、二人の想像上の名古屋散策を追体験することができる。

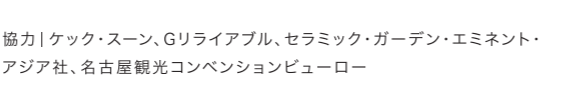
絵文字での会話に出てくる「鬼（＝ウォン）とおばけ（＝木下）」という設定にも注目してほしい。

### フォレスト・ウォン

《4uto-c0rrec4》

2021

ドローイング、プリント、印刷物、ビデオ



協力|ケック・スーン、Gリライアブル、セラミック・ガーデン・エミネント・アジア社、名古屋観光コンベンションビューロー



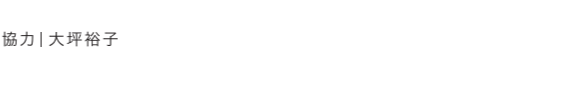
《4uto-c0rrec4（オートコレクト）》は、地図作りとミスコミュニケーション（誤解）をもとにしたフォレスト・ウォン（マレーシア・ペナン）と木下雄二（名古屋）による共同制作パフォーマンスです。このプロジェクトの初期段階における2人のアーティストの会話は、その言葉の壁ゆえに、主に絵文字とオートコレクト機能を用いて行われていました。しかし、これらの事前設計された絵文字と自動化されたAIによる補助は、英語を母国語としない人や非欧米人のユーザーにとって常に使いやすいものとは限りません。彼らのコミュニケーションは気楽な誤訳や時には誤解を招くこともよくありました。このコミュニケーション方法で、二人のアーティストは、フォレストによる昨年の名古屋への短い訪問の思い出と、木下によるあまり知られていない市内へのガイドをもとに、名古屋港エリアの地図を作成しました。カスタマイズされた絵文字を使用したこのパンフレットは、アーティストが文化の違いをナビゲートしながらパフォーマンス行為を実行するための彼ら流のガイドになっています。

### D.D.

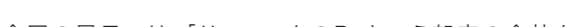
《Life Is a Carnival》

2021

テクセルポート、プリント、ビデオ



協力|大坪裕子



今回の展示では、「リフォームのB」という架空の会社を作ります。排除デザインでは不便にするというパラドシカルなオーダーとそれをデザインするという関係があり、面白く感じていました。

「リフォームのB」は、逆説的なリフォームを提案します。またオーダーも募集します。ノイジーな音楽があり、クレイジーなアートや、アグリーなアートはあるけれど、不合理な建築はなかなかないですね。

この逆説的なリフォームと名古屋の名所などを対応させて映像で紹介。それぞれ共通して内包しているものを引き出します。その中の一つ、名古屋では「下るだけの階段」を、ペナンでは「あるのか無いのか判断出来ない壁」を制作します。

(\*大須商店街を撮影した時、偶然にも「Life Is a Carnival」が流れていました。)

D.D.



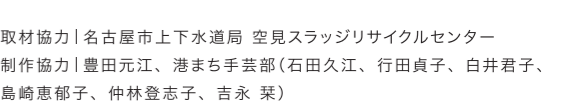
D.D.は、名古屋の都市景観をリサーチし、架空の会社「リフォームのB」へのオーダーとその回答となるイメージを映像で提示。オーダーの内容に合わせて、名古屋市内で撮影した映像、ストップモーションのアニメーション、ドローイングなどが挟み込まれる。港まちポットラックビルへのリフォームの提案として、階段の昇降を規制する構造体が設置されている。また、会場内に掲示されるポスターから、誰でも「リフォームのB」にリフォーム案をオーダーできる仕掛けとなっている。

### 宮田明日鹿

《Souvenir from Minato》

2021

糸、接着芯、サウンド、カッティングシート



取材協力|名古屋市上下水道局 空見スラッジリサイクルセンター  
制作協力|豊田元江、港まち手芸部（石田久江、行田貞子、白井君子、島崎恵郁子、仲林登志子、吉永 菜）

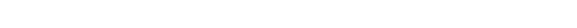


まちの人から聞く港の風景とエネルギーにまつわる工場は変化し続けていた。

このまちに住む人びととともに、風景の記憶、言葉で変化していく様子をペナントのようなものに記し仕立てた。

「港で作られていたお土産があったとしたら」を作品のスタート地点として調べていくと生活に欠かせないエネルギーにまつわる工場があった。港区のコークス工場が1997年でコークス生産が終了し、1998年から天然ガスの使用をはじめた火力発電所、2020年に完成した汚泥固形燃料施設がある。天然ガスはマレーシアからも輸入され、名古屋港に船で運ばれてくる。さすが、日本一を誇る貨物量の港である。

時代とともに変化していくエネルギー工場は、CO2削減と、リサイクルを声高々にあげていた。



ペナント|三角の旗。船や、アメリカの大学、スポーツなどで使われている。日本では独自のお土産文化を創り出したと言われているが今ではもう見なくなった。権威主義的な観光と相性がよく、どこへ行ったかの印として重宝されていた。

宮田明日鹿



宮田明日鹿は今回「名古屋港のお土産」をテーマに、自身が主宰する「港まち手芸部」のメンバーに「お土産」にまつわるインタビューを行い、名古屋港の名物として想起されるものとして固形燃料のコークスや発電所といったエネルギーにまつわるエピソードを聞き取る。そこから現在は観光資源として日の目を見る機会はあまりないエネルギー産業に着目し、最新の汚泥固形燃料化施設の視察などを行った。そうしたリサーチの結果から、名古屋港にまつわる歴史的なものや象徴的な名物、言葉やスケッチなどを絵柄に、かつて日本各地の代表的なお土産の1つであった「ペナント」を、宮田が普段使っているオリジナルの家庭用編み機を使って制作。ペナントの周りの装飾を港まち手芸部のメンバーが施した。

また、オリジナルアイテムを販売できるオンラインサービス「SUZURI」を使って、できあがったペナントの写真を図柄に使った商品を発注できる設えにして「お土産」というもの自体について考える枠組みにしたり、名古屋港にまつわる俳句を音声として会場で流していたり、宮田にとって実験的な試みを行う。



## 作品について

### 山下拓也

《TOKONA-X》

《刃物屋さん》

2021

粘土、木材、ビデオ

協力|伊藤伸之、MS Record Inc、DJ RYOW、ILLMARIACHI(TOKONA-X、刃頭)、DREAM TEAM MUSIC、鷺尾友公

名古屋文化発進局の名古屋本部とペナン支部にて、私は名古屋の2人の偉人を紹介します。展示室に置かれた塑像とプロジェクターによる彫刻が、彼らの偉業を伝えていきます。

ひとり目の偉人は、名古屋の誇る偉大なrapper「TOKONA-X」です。2004年26歳で夭折した彼の存在は、現在の日本のHIPHOPシーンにおいて伝説と化しています。本作にて、メインの素材として使われているMV「TOKONA 2020 GT」は、DJ、トラックメーカーである刃頭とのユニットILLMARIACHI名義で1997年に発表された「TOKONA 2000 GT」をサンプリングしたものです。TOKONA-Xのラップはそのままに、2020年、DJ RYOW率いるSPACE DUST CLUBによって、現行のビートヘリミックスされました。歌詞には、名古屋の地名や施設名が数多く登場し、その場所でのエピソードやイメージがディープに綴られています。煌びやかな名古屋の街模様を、当時19歳のrapperが紹介していきます。歌詞に登場する地名や施設を、TOKONA-Xの愛車としても知られるHUMMER H2で、DJ RYOWが巡るエモーショナルなMVです。TOKONA-Xの遺品である「TX」と刻印された3枚のドックタグチェーンが車内で揺れる様子もまた、その一役を買っています。

そして、ふたり目の偉人は、名古屋市在住のアートコレクター「刃物屋さん」です。「刃物屋さん」とは彼の愛称です。刃物屋を営んでいる為、誰彼ともなくそう呼ばれている男性です。本作品では、名古屋のアートシーンを25年以上も見続けた氏による、独自の視点で構築した名古屋のコンテンポラリーアート史を伺いました。2時間以上に及ぶインタビューから抜粋したエピソードには、名古屋の美術館やギャラリー、オーナー、コレクター、名古屋ゆかりのスター作家の名前が雪崩のように登場します。そして、登場する数々のアート作品のイメージを、彼の肖像の周りに添付していきました。名古屋の美術館やギャラリーのオープニングに行くとき必ずいる刃物屋さん。いつでも興味深いアート界隈の小ネタを披露してくれます。常に情熱的な(しかし一部真偽の不明な)アート大好きお父さんの貴重なお話をお届けします。

本作品には、絵画、彫刻、写真、またはそれらのポストカードやグッズ、MV内に写るビルや城などの建造物、車、人、などなど、様々なイメージが登場します。あらゆる物事が平たい画像や動画に変換されデータとしてアーカイブされてゆく時代に於いて、その作業に逆らうように、手作業によって立体感と物質感を与えていきました。画像や動画が、独自のテクスチャーによって彫刻作品へ生まれ変わります。

また物流の困難なコロナ禍での展覧会において、プロジェクションされている画像データのみをペナン支部へ送信しました。投影された画像に合わせて、粘土で彫像を造っていく作業を現地のアーティストが担当しました。オリジナルのデータから、それぞれ少し異なった双子のような作品が、名古屋とペナンで完成します。

山下拓也

\*《刃物屋さん》のインタビュー中の団体・個人についての言及は、私見に基づく内容です。  
作品性を優先し、ファクトチェックは行いません。フィクションとしてお楽しみください。

### テトリアーナ・アフメッド・ファウジ

《Nagoya Textile Sarong Set》

(ナゴヤテキスタイルのサロンセット)

2021

化学繊維にデジタルプリント、プリント、スライドショー

謝辞|ナゴヤテキスタイル

協力|ザムリー・モハマッド、アズマル・ダーティ・ドーナツ、イエー、ノー・ファティハ・ユソフ、プトゥリ・インタン・サリ

多くの消費財と同様に、私たちは市場に出回っている文化的系統を額面通りに受け取ることがよくあります。この作品は、かつてマレーシアで日本風のデザインの布を販売していたナゴヤテキスタイルという生地屋の推測しうる起源と文化的ブランディングの実践について探究することを目指しています。日本がルーツだと思われる会社の創業を記念するお土産として、男女用のサロンとその着用方法の指示書きが風呂敷で包まれたセットを作成しました。風呂敷は、日本で伝統的にものを包んで運ぶために使用されてきた布の一つです。サロンも、衣服として使用される以外に、過去には衣服を包む目的にも使用されていました。風呂敷のデザインは、Nagoya社のロゴと名古屋帯を巻いた着物の形を融合させたものです。そしてサロンのモチーフは、ペナンのマングローブ植物の主要な種であるBakau Api-api Jambu(バカウ・アピアピ・ジャンブ)という植物(ヒルギダマシ)です。

テトリアーナ・アフメッド・ファウジ

### フー・ファンチョン

《コムタのムチホコ

名古屋市からペナン州ジョージタウンへの外交贈呈品(案)》

2021

デジタルプリント、3Dプリントモデル

3Dプリント|ファブラボ浜松テイクスペース 

協力|ダレル・チア、クローマ・アートスタジオ、タン・ジーハオ

古代ヴェーダ(古典サンスクリット文学)の中のさまざまな生き物を混ぜ合わせたマカラや、中国の屋根の装飾に描かれた神話上の龍「螭吻(ちふん)」など、複数の起源に由来する「鯪鉾(しゃちほこ)」は、間違いなく名古屋の最も有名な文化的シンボルの一つです。1873年のウィーン万国博覧会では、名古屋だけでなく日本を代表するものとして取り上げられました。頭と尾が堂々と空を向いた伝説上の魚である「鯪(しゃちほこ)」は、江戸時代になると、城や塔の門、武家屋敷などで屋根の装飾品として頻繁に使用されるようになりました。この生き物には、悪霊を追い払い、火災を防ぐ力があると信じられています。文化的シンボル形成の研究としての私の作品は、名古屋市がペナン州ジョージタウンへ外交贈呈品を贈るという慣習を、ペナンの象徴である高層複合建造物「コムタ」の屋根に、「鯪」とペナンの象徴である「ムツゴロウ」が掛け合わされた「ムチホコ」の装飾を付け加えるという形でコンセプト化したものです。

フー・ファンチョン